みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

「多みんぞくニホン」特別展における在日華僑

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 張, 玉玲 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001545

庄司博史・金美善編『多民族日本のみせかた――特別展「多みんぞくニホン」をめぐって』
国立民族学博物館調査報告　64:161–174(2006)

「多みんぞくニホン」特別展における在日華僑

張　玉玲

1　はじめに

2004年３月25日から６月15日にかけて，国立民族学博物館において特別展「多みんぞくニホン―在日外国人のくらし」（以下，特別展）が行なわれた。日本で初の在日外国人展とされるこの特別展の背景として，日本人口に占める外国人の割合の増加が指摘される。外国人の増加によって，様々な面で，日本人と外国人との共生問題が顕著となってきているにも関わらず，在日外国人及び彼らの文化に対する偏見が存在しており，外国人排除論がまだ勢力を維持している。

日本における「外国人」の中で在日コリアンに次ぐ第二の集団，在日中国人の場合は，戦前から来日し定住するようになった「華僑」[1] や，近年新たに来日した新華僑及び日本人残留孤児・婦人の家族として来日したものなど，文化的背景や来日ルートなどにおいて異なっており，彼らに関する情報も，テレビや新聞などで取り上げられたニュースに限られているため，一般の日本人が在日中国人に対していだくイメージはかなり偏っているといえる。その一部をなす華僑に対してはなおさら知識は乏しいように思われる。

したがって，上記の背景下で行なわれた今回の特別展において，「多民族」と「暮らし」とのキーワードを軸に，できるだけ在日華僑の歴史，文化，教育の各側面を紹介できるように，担当者の陳（天璽）と張（玉玲）が展示品の収集に臨み，展示内容や展示方法を工夫した。来館者の中には，その殆どが華僑の存在すら知らない日本人に加え，日本社会に同化した「中国も華僑も知らない」華僑三世，四世も多くいると想定し，在日華僑の歴史や文化をより多くの人に紹介し，理解してもらうという期待を込めた。展示の結果，日本人来館者には在日華僑の歴史，文化を紹介し，彼らの存在をアピールできた一方，華僑自身に対しても自信を与え，誇りを持たせることができたと思われる。また学術の面においては，この展示を企画・準備し，そして正式に公開することを通して，在日華僑について考え直す機会を得たのではないかと考えられる。

本研究報告では，①在日華僑コーナーにおける展示を振り返って，「多みんぞくニホン」という展示テーマとどのように関わっているのか，②「老華僑」の何を，どのように，メッセージとして伝えようとしたのか，③その予想される教育効果を分析し，展示の改善すべきところについて省みる。ここで，華僑自らによる文化表象の現状（華僑自らの手による華僑歴史博物館，中華街を舞台とする芸能や祭祀の「演出」）と照らし合

わせ，今後の他者展示の在りかたについて検討する。

2 「華僑」をどのように展示するか

2.1 「華僑」と「在日中国人社会」

在日中国人は日本社会のエスニック集団の中で，最も長い歴史を持ち，在日コリアンに継ぐ第二のエスニック集団である。長崎においては既に16世紀，華僑コミュニティを形成したが，今日の在日華僑の原型となったのは，幕末に来日し，後に長崎，横浜と神戸などを中心に日本各地に移住した中国人たちだとされている。彼らは，「日米修好通商条約」の締結（1858年）後に開港された長崎，神戸，横浜，新潟，函館などに殺到した欧米商人に追随し，買弁や使用人として広東や福建などから来日した。後に，これらの中国人を頼りにさらに多くの中国人が来日し，貿易，料理，裁縫など多様な職業につくようになり，同じ出身地や職業のものは同郷会や同業会を作り，互いに助け合いながら日本社会に定着していった。これらの中国人は本稿で扱う「華僑」であり，特別展の「在日中国系」の中の「老華僑」となるのである。

19世紀末期までに，長崎，阪神地区，横浜と函館においては，華僑の宗教，教育（函館だけは華僑学校はなかった），文化団体が続々と設立され，華僑社会が形成された。登録の中国人数も柳条溝事件の起こった1931年や，芦溝橋事変の起こった1937年に減少した以外，殆ど増加の一途を辿ってきた。当時多くの華僑の生活形態は，出稼ぎ（中国人男性が殆どであった）の目的で来日し，経済的基盤が出来上がると，家族を呼び寄せる，或いは帰国するという様であり，その間，定期的に日中間を往来することによって，中国の故郷とのつながりを保っていた。しかし，第二次世界大戦及びそのあと長く続いた冷戦によって，大陸から来日する中国人は皆無となり，在日華僑も中国とのつながりは断ち切られた。その間，華僑社会の日本社会への同化が余儀なくされた。1972年に，それまでに台北に拠点を置いた「中華民国」と国交を結んできた日本は，一変して北京政府の中華人民共和国と国交関係を回復した。中国の「改革開放政策」が打ち出された1979年以降，中国本土から「留学」，「研修」などの目的で来日し，その後定住していく新たな中国人「新華僑」や，日本人残留孤児，婦人及び彼らが中国で築き上げた家族とともに日本に帰ってきたいわゆる「帰国者」が，在日中国人社会の新しいメンバーとして加わり，日常生活や教育などの面で，それまで中国人社会の長老である華僑と関わるようになった。こうして，在日中国人社会は主に，来日の時期や目的などにおいて異なる，「華僑」，「新華僑」，「帰国者」の三つから構成するようになった。

一方，日中国交回復後，中華街が日本人に人気のある観光地へと発展していったと同時に，華僑社会の内部では，世代交替が進み，華僑二世が中国人意識の薄い三世を，華僑社会を受け継いでいく後継者として育成しようと悪戦苦闘している。中華街の存続と

発展，そして次世代の中国人意識の確立のために，華僑がそれまで伝承してきた中国伝統文化に新たな要素を取り入れ，或いは新たに創出するなど，活発な文化活動を展開することによって，自らの存在を積極的に日本社会にアピールし始めた。

以上見たように，出稼ぎなどの目的で来日し，その後日本に定住するようになった在日華僑は，疑いもなく日本社会を構成する主な民族集団の一つである。華僑は，中国文化を継承しながら，日本文化の要素も吸収してきた。こういった「華僑」は民族性において，他の民族集団と区別されるし，日本定住の歴史においてまた在日中国人のほかの集団と異なっている。共同研究会およびそれ以外の集まりでメンバーらが討論を重ねるうちに，在日中国人コーナーは「華僑」,「新華僑」,「帰国者」の三部分に分けて展示することになったのである。

2.2「老華僑」の特徴とその表し方

今回の展示は,「多民族社会」,「外国人の暮らし」などをキーワードとし，個人としての外国人の暮らしを通して在日外国人の文化を理解してもらうという意図に基づいて行なわれたものであり，民族構成や文化背景が益々多様化する日本社会の現状と問題点を提示し,「日本人」と「外国人」が共生する必要性及び共生の条件となる多様性への寛容の大切さを主張することを目標としていた。この趣旨を受け，筆者が陳天璽とともに担当した華僑コーナーでは，華僑の来日，日本定住の歴史や現在の状況などを概説的に紹介するだけでなく，日本人や他の民族集団そして新華僑，帰国者と区別される特徴を打ち出すことと，華僑が日本人と関わりながら「共生」してきたことを強調することも目標としていた。

幕末に来日し，150年ほどの日本定住の歴史を持つ華僑は，新華僑や帰国者とは，同じ「在日中国人」と認識されていながらも，華僑は行動様式や価値観，及び帰属意識などにおいて，この両者と大きく異なっている。日本社会に定着していく過程において，二世，三世の華僑は祖国中国にルーツがある一方，生まれ育った日本に深い愛着を抱くようになり，彼らが伝統的な中国文化を維持しながらも，日本文化やほかの文化を選択的に取り入れてきた。これは，中国本土の文化に強い帰属意識を持つ新華僑や多くの帰国者とまた明らかに異なっているところである。また，華僑のこうした特徴を形成させる150年近くの歴史は，華僑が日本社会に定着していった歴史であり，中国文化と日本文化が華僑を通して融合していった歴史でもあった。特別展では，こうした華僑をわかりやすく興味深く展示するために,「華僑」コーナーを「来日」,「仕事」,「祭祀」,「家族」,「人生」,「社会新出」,「料理」,「教育」の八つのサブタイトルに分け，華僑の使用物や写真，映像，文字などを通して華僑と彼らの暮らしを紹介することになった。

一方，日本人にも親しまれてきた華僑文化の一つ，華僑コミュニティの中心である中華街に関しては，中華街の歴史や現在の様子などについて紹介するが，ひとつのテーマ

としては取り上げなかった。その原因としては，華僑居住地域の分散化に伴い，中華街は華僑のコミュニティの場ではなくなり，そこに見られる食文化，祭祀なども華僑文化の一部に過ぎない[2] からである。現在の中華街が在日華僑社会の重要ではあるが，ただの「一部」であるというメッセージをこめて，華僑社会の歴史と発展に関連する部分，例えば，中華街の形成やそこで働く人びとの様子及び中華街の観光化に伴って有名になった年中行事など，を紹介することに留めた。

2.3 華僑展示のもうひとつの狙い

華僑コーナーでは，特別展の趣旨（前述）以外もう一つの狙いがあった。

現在華僑社会を支えている華僑は，殆ど二世や三世以降の世代であり，華僑社会の世代交替が急速に進んでいることを，展示品の収集段階において改めて実感させられた。華僑は日本に定住していくにつれ，中国の故郷とのつながりも同時に薄くなっていった。中国はもはや「祖国」ではなく，自分のルーツがあるところとしてしか感じていないようである。一方，生まれ育った居住地日本を「故郷」と見なす一部の華僑は，自らを「横浜華僑」,「神戸華僑」と位置づけている。つまり，在日華僑は日本社会へ融合して行く中で，徐々にエスニック・アイデンティティを獲得したといえる。こうした「中国人意識が希薄」だとされる華僑は，中国語が話せず中国の歴史・文化だけでなく，一世である父母，或いは祖父母の来日や日本に定住していく過程についても知らないものが殆どである。この意味においては，今回の展示は，展示される側の華僑にとっても，貴重な学習機会となればと願った。

一方，観光地として発展していった中華街及び日本の多民族多文化社会の動きを通して，益々周囲から注目を集めるようになった華僑は，自らの歴史や文化を，誇りをもって積極的に主張し始めた動きが観察されている（張（2005），次項で詳述）。しかし，これらの文化活動は，特に長崎，神戸と横浜のいわゆる三大中華街のある地域の華僑が独自で行なうものが殆どであり，他地域の華僑の活動状況や日本華僑全体の様子についての情報が少ない。また，これらの地域でも，文化活動に携わっておらず「華僑」の歴史や文化について知る機会に恵まれない華僑が多くいる。従って，各地の華僑を取り上げ，バランスよく紹介する華僑コーナーは，少しずつ「華僑」という存在を客観的，かつ全体的に見直そうとしている華僑にとって，他地域の華僑を知り，自らを見直す機会となることが期待される。

こうして，華僑コーナーは，日本人，在日中国人及び他の「外国人」の来館者を想定して，展示品の収集や展示の計画を進めていった。以下，華僑コーナーにおける資料収集，展示内容，方法などを振り返って，自己評価してみたいと思う。

3　展示準備から展示まで

3.1　資料の収集と華僑展示コーナーの完成

老華僑コーナーの展示資料は，このコーナーを中心となって担当した陳天璽とともに2003年より一年ほどかけて収集してきた。これらの貴重な資料を収集し，多くのモノを借用できたのは，ほかならぬ，これまでフィールドワークにも協力頂いた華僑の方々のご理解とご好意があったからである。さらに，展示資料の収集段階では，展示のバランスを考慮し，これまで研究で関わってきた横浜と神戸だけでなく，ネットワークが薄かった大阪や長崎などの地域にも幾度も足を運び，新しく人間関係を構築した。また「大陸系」華僑と「台湾系」華僑[3] の両方を展示することを心掛けた。

老華僑の暮らしを反映するモノは，ほとんど老華僑の持ち物であり，「古い」ものが多いが，中に毎年の祭祀のために新しく作られるものもある。そしてそこに関わっている新華僑の存在も目立っている。例えば，神戸の普度勝会で，あの世にいる先祖に送るために燃やされる「冥宅」は，現在，中国福建省福清出身の新華僑によって作られている。また，中華街の街づくりや華僑学校の教材編纂など，目に見えないところで新華僑が従来の老華僑社会に深く関わっていることを，展示の準備段階で実感した。

モノ以外，華僑社会の各方面を反映する史料，写真なども関係する博物館や資料館から借用したり，或いは現場に行って，カメラ，ビデオ撮影などを行っていた。

3.2　展示された「在日華僑」像

収集してきた展示品や資料に対して，特別展の趣旨に照らし合わせ，展示のスペースなども考慮したうえで，さらに細かい選別・分類作業を行った。具体的には，個人活動では，生活用品，一生（出生，教育（成長），結婚，死亡）を，集団活動では，団体の象徴，祭祀用品などを展示することにした。さて，このような展示によって，どのような「華僑」像が作り上げられたのだろう。以下，各サブコーナーごとの意図およびに基づいて選ばれた展示品を分析し，展示の成功点と改善点を考えたいと思う。

〈来日〉中国人の来日は，幕末から始まっていた。その後，戦争などによって中断されたこともあったが，同郷人や同業者を頼りとした中国人の来日は終戦まで続いた。各時期における華僑の来日目的やルートは時代や地域によって異なっており，展示品以外も，文字による説明が必要だったため，われわれは日本華僑社会の形成期[4] とされる明治初期前後における華僑の来日に重点をおいた。当初の全体的な様子を，当時の航路図や開港地の一つである横浜を例に表そうとした。また，1911年に故郷を離れて来日したある華僑が当時使っていた洋服や衣装ケースおよび，来日後の身分証明書，帰国と再入国に必要とされた帰国証明書（華僑連合会）や帰国証明願（日本地方警察署），帰国

登記証（帰省先の僑務委員会）などの書類を展示した。これらのモノや書類を通して，19世期末から20世期初期の来日華僑像と彼らが日本社会に置かれた初期の状況を描こうとした。

また，現在の華僑コミュニティの起点となる中華街の現在と昔を写真で現すことにした。ここで，特別展のテーマである「多文化共生」を表すものとして，当時（1861年）横浜の外国商館のお正月の風景を描いた絵（『横浜商館真図』歌川文秀 1861年 横浜開港資料館所蔵）を展示した。そこには，1859年横浜開港した後，中国人を介して日本人と欧米人が商取引をしていた風景が描かれている。そしてそれ以外にも，インド人男性や羽根つきをしている着物姿の日本人女性と洋服姿の外国人女性などが描かれている。中国人が開港当時の日本において活躍していたこと，そして幕末日本において多民族，多文化が共存していたことを物語った絶好の資料である。

〈仕事〉日本開港まもなく来日した華僑は，欧米人の通訳や使用人以外，貿易商やピアノ製造，両替商など多種な職業についていた。それが，明治中期以降制定された日本の外国人労働者への制限政策と共に，専門性の高い「三把刀」の職業（料理業の包丁（菜刀），裁縫のはさみ（剪刀）と理髪業のはさみ（剃刀））へと限定されるようになった。そしてこの状況はここ二十年前まで続いていた。現在，華僑社会の世代交替の進行や日本企業の外国人への門戸開放につれ，華僑の職業は多様化し，日本人と変わらなくなった。観光地として有名となった中華街の目玉の一つ「食」やチャイナドレスなどが日本人によく知られているということもあって，中国式の包丁「菜刀」，まな板，そして裁縫用のハサミ（剪刀），アイロン，会計用の算盤などの実物を展示し，華僑社会の「三把刀」を表現しようとした（理髪業に使われているはさみ（剃刀）は見つからなかったため展示できなかった）。ここで長崎の四海楼と今長崎名物となったチャンポンも紹介した。華僑が裸一貫で興業し，奮闘したことだけでなく，周囲の中国人社会，日本人社会の変化や需要に応じて，独自な生き方を歩んできたことを強調した。もうひとつ特筆したい展示品は，清末の華僑が中国に輸出したマッチの，阿片吸飲の弊害と治療方法などが書かれているラベルである。事業に携わりながら，祖国の富強を願い，庶民教育を図ろうとした当時の華僑像を描いた作品ともいえる展示品である。

〈祭祀〉祭祀や年中行事及びそれに伴われる芸能は，華僑の文化的側面やアイデンティティを判断する重要な手がかりである一方，日本人，在日中国人および他のエスニック集団が中国文化を知り，中国人を認識・理解する鍵でもある。日本全国の華僑は，出身地や居住地の文化に同化する程度，或いは日本社会で果たす役割がそれぞれ異なっており，現在各地域で受け継がれている祭祀や年中行事はその形態と内容においてそれぞれの特色をもっている。こういった在日中国人の祭祀を出来る限り全面的に反映するため



写真１　「祭祀」コーナーの一角　2004年３月筆者撮影

右の「冥宅」（亡くなった人があの世で住む家）は華僑の伝統行事「普度勝会」で欠かせない物品であるが，神戸では毎年福建出身の「新華僑」王さんによって作られている。

に，華僑共通の祭祀とともに，各地域の代表的な祭祀を取り上げて展示することにした。共通の祭祀（行事）としては，春節（旧正月），清明節（墓参り）や龍舞，獅子舞を，各地の行事としては，長崎のランタン・フェスティバル，神戸の普度勝会そして横浜の関帝誕などの伝統的，或いは新たにアレンジしたものをその代表的な行事として選んだ。

しかし，春節祭のような「共通」の行事でも，それぞれの中華街の実情に合わせて創りだされた日本式の「お祭り」であり，その内容が必ずしも同じではないことは，展示品だけでは伝わらない。また，中華街のない長崎，神戸，横浜以外の地域に居住する華僑の祭祀（家庭規模でも）は表わすことができなかった。

「祭祀」コーナーでも，華僑の「中国的」部分を強調すると同時に，華僑と日本人社会が一体化したことも表わそうとした。華僑も参加する横浜中区のお盆の神輿の写真や，日本人ボランティアが参加する中華街の民族衣装仮装行列の写真が選ばれた。

〈家族〉個々人の華僑が生活する拠点としての「家」は，華僑コミュニティをミクロな視点から反映する重要なコーナーである。そこから，来館者が濃厚な「暮らし」の雰囲気を感じ取り，「華僑」をより身近な存在として認識し，彼らの文化を理解することが期待できる。また，「集団」としての華僑を現すサブコーナーが多いため，「個人」としての華僑像を「家族」を通して描いて伝える必要があった。このコーナーでは，一世華僑から受け継いできた中国文化の中に，日本文化の要素を自然な形で生活に取り入れた二世華僑の家（居間）を再現しようとした。先祖の位牌や亡くなった祖先の写真や家族アルバムおよび香炉，燭台などが置いてある神棚を中心に，その両側に対聯を飾り，周りに中国風のテーブルや椅子などを置いた。ここでは，実際に華僑の家で飾っている招



写真 2　「家族」コーナーの一角　2004年 3 月筆者撮影

「対聯」,「位牌」と中国楽器などで中国的雰囲気を出すとともに，招き猫としめ縄で華僑の家庭内に見られる日本的要素も強調しようとした。



写真 3　「人生」コーナー　2004年 3 月筆者撮影

現在の若い華僑の結婚式では，こうした衣装は殆ど使われなくなったが，その前の世代の華僑は如何に人生の重要な通過点で中国の伝統にこだわったかを強調した。

き猫やしめ縄を強調するように飾った。また，華僑が用いる言語・文化のハイブリット性をテーマとしてきた，展示担当者の陳天璽が個人HPで作成した四コマ漫画のひとつを展示した。神棚では，仏教と神教が混じったこと，四コマ漫画では，中国語と日本語を混ぜて使っている華僑の言語特徴を表すのが目的だった。

〈人生〉このコーナーでは華僑の一生を,「出生」,「結婚」,「葬式」などいくつかの通過儀礼を通して表そうとした。出生した赤ちゃんが使う銅のネックレスやブレスレット，

結婚式に使われる新婦のチャイナドレスと新郎の中国式長袍，結婚証書，そして中国の故郷で行なわれたお葬式の写真などを，実物と写真を通して紹介した。実際，日本で生活している華僑は一生の通過儀礼でこれほど中国の伝統に固執するのは，一世と二世だけだと思われる。このサブコーナーでこのように華僑の「中国的」部分を強調するのは，日本社会に積極的に溶け込もうとしてきた華僑が，人生の重要な通過点では中国の伝統にこだわっていることを伝えたかったからである。ちなみに，華僑の一生の中で最も重要視されている子どもの教育は，改めて〈教育〉コーナーで華僑学校とともに紹介することにした。

以上の両コーナー，〈家族〉と〈人生〉では，二世華僑を中心としている。そのほとんどが日本人と結婚し，新たな家庭を作ろうとしている若い三世華僑は，もはや展示品（シンボル）が持つ意味合いすらわからない今だからこそ，両コーナーを通して，自らの出自についての理解を深めることが期待される。

〈社会進出〉このコーナーでは，各地の華僑総会一覧，福建同郷会，地蔵王廟などの組織・団体についての概説的な紹介が中心となり，華僑社会と日本社会との関わりや個々人の華僑が日本社会や日中交流への貢献を紹介した。ここで，作家の陳舜臣をはじめとする，華僑社会だけでなく日本人にもその名を知られている華僑や孫文や中国の民主革命を支援した華僑たちの事績を取り出して紹介した。

〈料理〉日本の中華料理店のほとんどは，マーボー豆腐やエビチリなどすっかり日本人に受け入れられた「有名」なメニューしか出さないようにしている。最近，海外観光ブー



写真 4「料理」コーナー　2004年 3 月筆者撮影

日本人が観光やテレビを通して作り上げた「中華料理」のイメージとはやや異なる，華僑の出身地の特色がある「家庭料理」を展示した。

ムの高まりやメディアなどの発達により，味覚を鍛えてきた日本人観光客は，中華街に「本場の味」を求めるようになったため，華僑が経営する中華料理店も，日本人の口に合わせてアレンジするという従来の方針から，本格的な中華料理を提供する方針へと変わった。しかし，日本で生活する華僑の家庭ではどのような料理を食べているのだろうか。それは，必ずしも上記のどちらでもなく，華僑の多様な出身地が故の多様性と恣意性があることを来館者に紹介するために，華僑の家族が囲む食卓の写真やレプリカ，或いは実物の調味料を展示した。

〈教育〉日本に現存するただ五校の華僑学校を中心に，老華僑が行なっている民族教育を紹介した。一般の人びとが抱くような，殆ど中国語，中国の歴史・文化だけを教育内容とするいわゆる狭隘な民族教育のイメージをくつがえすために，小学校では，中国語，中国文化を中心に，中学校から中国語と中国文化のうえに，日本の中学校のカリキュラムを加えて教育している現状を紹介した。また，実物の教科書，成績通知書などランドセルの中身のほか，実際に華僑学校で撮影したビデオも編集し，展示した。これらの展示資料を通して，華僑の日本での定住を前提に，中国語，中国文化を身につけると同時に，日本の高校，大学に進学し，日本社会で生きていくための力を養成するという華僑学校の方針を強調した。

要するに，華僑コーナーでは，能動的に日本社会に溶け込みつつ，中国の伝統を保持し或いは新たな文化を創出していく在日華僑像を描こうとした。計画した通りの展示ができたが，時間的制限や研究者自身の見識不足などで，展示は反省すべき点も多くあった。次項では，華僑自身による展示を概観し，他者展示の可能性を考えてみたいと思う。



写真 5　「教育」コーナー　2004年 3 月撮影

華僑学校に関する多くの実物と写真をもって，日本で定住するための華僑による「民族教育」の現状を表そうとした。

4　モノを媒介としたコミュニケーション

近年，マイノリティの立場から，伝統文化をまもることへの自覚を深めている在日コリアンや中国人などの「外国人」，およびアイヌ，沖縄の人びとは，芸能，工芸，建築，儀礼などを日本社会のマジョリティである「日本人」や他地域からの旅行者に対して積極的に「提示」するようになった。例えば，近年，在日華僑による文化表象が，博物館や祭祀・芸能に伴われる祭典の舞台という「公共空間」において行われてきた。日本社会に同化し，本当の「中国文化」を忘れ去りつつあるとされる彼らが，提示・主張しようとする中国文化は真正であるか否かを議論されることもあるが，しかしそれより，彼らによる意図的な文化表象の政治性，すなわち提示する文化に新たな意味づけをし，周囲に与えようとするメッセージの中身はむしろ興味深く思われる。ここで，華僑が自らの歴史・文化を積極的に紹介しエスニシティを主張する華僑歴史博物館における展示内容と方法を検討してみたいと思う。

4.1　神戸華僑歴史博物館からのメッセージ

神戸華僑歴史博物館は，貿易商の傍ら，孫文・華僑研究者，華僑教育者としても活躍していた華僑二世，故陳徳仁氏によって，1979年に神戸中華総商会（KCC）のビルの２階で開館された，日本唯一の華僑専門の博物館である。以前，当歴史博物館では，陳氏が長年収集してきた世界中の華僑に関連する史料，華僑の著作及び器物が収蔵され，展示されていた。しかし，2003年４月以降，神戸華僑の歴史を記述的に展示するという方針に基づいて，幕末神戸開港に伴って移住してきた華僑が神戸に定住していった歴史を軸に，関連史料や器物を展示する方針に転じた。また，ビルの10階に新たに資料室を設けて，華僑関連の資料を広く収集し保存することになった。

当歴史博物館における展示の特徴は，神戸華僑の日本社会に根ざしている現状を踏まえ，華僑自身の価値判断基準によって華僑の歴史と文化を表象するシンボリックな史料と器物が選別され展示されていること及び，これらの展示を詳細に紹介する華僑出身の案内役がいることである。つまり，華僑たちは，自らの歴史と文化を自ら解釈し，来館者に説明することによって，華僑のエスニック集団としての存在価値を主流社会に主張しようとしているのである。

今日の華僑社会は，世代交替が進むにつれ，第二次世界大戦前後に生まれ，東西冷戦や日中国交回復などを経験した華僑に代わって，華僑の歴史や文化を知らない，或いは興味を持たない若い世代が華僑社会をリードしていく時期になってきている。神戸華僑歴史博物館は，次世代の華僑にエスニック・アイデンティティを確立させようとする年配の華僑たちの願いも込められているのである。

ちなみに，中華街を舞台に年々創出されていった，中華街のイベントとして上演され

ている「伝統文化」も，中華街の観光化の「経済的」産物とも言えるものの，在日華僑の文化と存在価値を積極的に主張するところにおいて，神戸華僑歴史博物館と同じ性質の文化提示活動と見てよいだろう。なぜなら，そのいずれも華僑が自らの文化を意図的かつ組織的に主流社会に対して解釈，主張し，特定なメッセージを伝える傍ら，次世代が中国文化に興味を持ち，華僑アイデンティティを獲得するエスニシティの拠点を作ろうとしているものだからである。

4.2 他者展示の可能性

以上の，華僑が意図的に自分たちの歴史や文化からシンボルを選定し，それらを展示し，解釈することによって日本社会と華僑社会に特定のメッセージを送ろうとしている現状は，他の先住民や移民集団にも観察される「アイデンティティ・ポリティクス」に通じると考えられる。こうした状況に直面した中で行われた，展示側が「華僑」ではない今回の特別展は，またどのように評価すべきだろう。

実際，近年博物館が展示側の権力を顕示するイデオロギーの装置であり，その展示は不可避的に政治性を帯びていることが批判されるようになった。日本でも，千野は以下のように述べている。「ミュージアム展示とは，ある目的をもって学芸員たちが作り上げた，一個の『作品』なのである。それは，学術論文や小説や音楽や演劇や，あるいはインターネット上のホームページと同じく，作品である。（中略）どのような立場からも等距離に身を置く，透明で中立的な展示など存在しない」（千野 2000：109-110）。つまりこの政治性は，展示する側と展示される側の立場と見方によるもので，とくに展示する側と展示される側が支配と被支配の相互関係にある場合は，一層に顕著に見えてくる。

今回の特別展は，「支配」側である日本の民族学博物館による展示ではあるが，在日華僑コーナーは，華僑研究に従事している中国系研究者が担当しており，華僑が日本社会に定住した歴史や彼らの「暮らし」の各側面を「モノ」を通して的確に伝えようと努めた。以上の各項目で見てきたように，特別展の主旨に合わせて，「在日華僑が日本に居住する一外国人集団であり，その個々人は日本社会の一員でもある」というメッセージが最も伝わるような「もの」が選ばれて展示されたのである。「在日華僑」コーナーを通して，これらの「中国文化を維持しつつ，日本社会に貢献してきた」在日華僑が現在の多民族・多文化化した日本社会の欠かせない一部であるということ，あるいは，現在の日本社会が在日華僑のように民族文化・伝統を保持しながら，日本社会に溶け込もうとした「外国人」グループと彼らの文化によって特徴づけられようとしている，ということを来館者が感じ取ることができただろう。もちろん展示される「在日華僑」から見れば，特別展における「華僑」についての展示は，強調しすぎる部分或いは説明不十分な場合はあるだろう。しかし「日本」を代表するともいえる「文化の表象の装置」国

立民族学博物館が，「在日華僑」を「日本」社会の一員として認め，そして彼らの日本社会への貢献とともに日本と中国の両方の特徴を持つ「華僑文化」を肯定的に取り上げたことには大きな意味があった。前述した神戸華僑歴史博物館のように華僑自身による自己主張もなされてきたが，日本社会という「他者」によって正面から取り上げられることははじめてのことであり，在日華僑に大きな自信を与えたに違いないだろう。また，在日華僑コーナーでの展示は，展示する「モノ」の内容こそ異なったものの，その意図と効果は華僑自身による文化の表象と重なっている部分が多いことも，以上の分析からも伺われた。従って，今回の特別展は日本人来館者だけでなく，在日華僑にとっても特別な意味を成す展示となったのではないかと思われる。

5　終わりに

以上，「多みんぞくニホン―在日外国人のくらし」の華僑コーナーについて，その展示内容や方法などについて分析してきた。担当者は特別展の主旨に合わせて，今まで行ってきた華僑研究の成果を踏まえながら，「多民族日本」の一員である在日華僑像を描いてきた。この特別展を通して「日本人」および日本に居住する他の民族集団は，在日華僑を含めた「外国人」に対する理解を深め，そして自分自身について考え直すことができたと考えられる。如何にして日本の「多民族化」した現実を正面から受け止め，「日本人」と「外国人」とともに真の「共生」を実現していくかは今後の課題として残されるが，今回の特別展の準備と展示を通じて得たノウハウはこの課題の実現に役に立つものであろう。

注

1)　中国政府の規定によれば，海外に移住した中国人は，中国国籍を保持する「華僑」と居住国の国籍を取得した「華人」とに分かれている。最近まで日本の華僑研究では，中国政府の華僑，華人定義に従って在日中国人グループを様々な視点から分析してきたが，近年，こういった政治的意味合いをもつ定義ではなく，文化的側面を重視する立場から，華僑と華人を一括して「華僑・華人」あるいはどちらかを用いるようになった。日本では，日本国籍を取得したものでも，自らのことを「華僑」と称するのが一般的であって，本稿では，「華人」ではなく「華僑」という一語をもって中国人の血を引き，中国文化に帰属意識を持つものをあらわすこととする。

2)　中華街が「本格的な」中国文化を提供する観光地として発展していくにつれ，華僑の祭祀や文芸など多くの中国文化が復興され，或いは新たに創りだされた。しかし，観光客の誘致という「経済的」狙いを含めたこれらの文化は結果的に若い世代の華僑の華僑アイデンティティの確立を促す「文化的」な面があっても，華僑の「暮らし」を反映するものではなくなった。

3)　1945年日中戦争が終わった後，中国共産党と国民党がさらに 4 年間の内戦を交わした。その結

果，1949年に共産党政権が北京に中華人民共和国を成立させた一方，国民党は台湾で「中華民国」政権を維持し続けた。北京と台湾政府の政治的対立は，華僑社会の内部に影響を及ぼし，1952年横浜では華僑学校が二分するとともに華僑社会も中国大陸支持の「大陸派」と台湾政府支持の「台湾派」に分裂した。

4）長崎は地理上の原因もあり古くから中国人の渡来が盛んで，長崎では華僑社会が16世紀に既に形成されたとの意見もあるが，今回の展示では，今日の華僑社会の基盤が形成される幕末を「在日華僑社会」の起点としている。

文　献

青木　豊
　2003 『博物館展示の研究』東京：雄山閣。
金子　淳
　2001 『博物館の政治学』東京：青弓社。
倉田公裕
　1979 『博物館学』東京：東京堂出版。
瀬川昌久編
　2003 『文化のディスプレー―東北アジア諸社会における博物館，観光，そして民族文化の再編』東京：風響社。
棚橋源太郎
　1949 『博物館学綱要』東京：理想社。
千野香織
　2000 「戦争と植民地の展示―ミュージアムの中の『日本』」『越境する知１　身体：よみがえる』東京：東京大学出版会，109-143頁。
張　玉玲
　2005 「日本華僑による文化提示とエスニック・アイデンティティの主張―神戸華僑歴史博物館の考察を中心に」『国際開発研究フォーラム』29，名古屋大学大学院国際開発研究科，153-171頁。
吉田憲司
　1999 『文化の「発見」―驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』東京：岩波書店。
Henderson, Amy and Adrienne L. Kaeppler（eds.）
　2003 『スミソニアンは何を展示してきたか』（松本栄寿・小浜清子訳）横浜：玉川大学出版部。